

## 中国仏教美術史国内基礎資料の調査（1989年度）

仲 嶺 真 信

アジア歴史文化研究所美術史部門において、ここ数年筆者は、日本国内に所蔵・保管されている中国北魏時代仏教美術史と関連する諸作品（資料）についての所在確認および追跡調査などの基礎的調査を行っている。これは、1983年度に中国現地で行った石窟調査の際に、いかに日本を初めとする海外諸国に数多くの中国の文化財が保有されていることかと痛感したことがその主な動機になっている。つまり、幸か不幸か中国以外の海外諸国へ何らかの事情によって流出した文化財（断片を含む）の追跡調査を実施することが、先の調査の欠を補うことにつながるものと確信したからである。筆者が調査した中では、とりわけ洛陽の龍門石窟の破損の度合いは筆舌に尽くし難いほど痛ましいものであった。仏洞はもちろんのことだが、龍門全山が人為的破壊と自然崩壊との二重の破損を被っている現況であった。このような状況において復元的追跡調査は困難を極めることは確かだが、しかしかろうじて、日本国内の公私の博物館・美術館などの機関に保管されていたり、あるいは個人のコレクションとなっている諸作品（断片）などがあるので、可能なかぎり実物を拝見した上で、その基礎的なデータを残しておきたいと念じて実施している次第である。その調査は、必ずしもスムーズに進んでいるわけではないが、遅々としながらも発展させたいと考えている。

現在のところ、東京国立博物館の資料館（以下資料館）を中心として、北魏時代前後の関連資料を収集している段階である。ところが、肝心の資料館においてその検索カードの記載記事が時々誤っていたり、あるいは、明らかに同一資料（作品）を扱ったと考えられる新旧の両カードの具体的な関連性がはっきりしないがために、その判別に多少の時間を要することなどがあり、いささか不便を感じている。例えば、個人コレクションの場合であるが、かつて東京国立博物館において何度かまったく同一の作品を展示したことがあり、さらに何度かの展示の間にその作品は実際はAコレクションからBコレクションへと移っている場合、当然のことながら新旧の両カードのいずれにおいてもその旨を明記しておくべきである。しかし、実情はそれがなされていないがために、ABの複数の限られた写真（図版）を何度もじっくりと見比べて見て、そこで初めて両者が（撮影時は違いが）まったく同一の作品であることがはっきりすることが多いのである。

あるいは、公的機関でも東京大学工学部建築学教室にかつて所蔵保管されていた五胡十六国時代の金銅仏坐像の場合は、建築学教室においてその所在を伺ってみても、行方が不明で確認されない例もあった。しかし、資料館においてカードを検索し図版を見ると何と目的の金銅仏坐像が出てきた。このように、一方においては所在不明のものが、また一方においては確認される例もあるので、その間の事情をもう少し追跡する必要があると考える。

ところで、個人コレクションの拝観および調査についてももう少し触れておこう。実はいまだ完全な調査は実現できないでいるが、交渉がとて難しい。C作品は、法量の測定調査はすでに済ませているが、写真・スケッチなどの許可がいまだ降りず、目下交渉中である。なおこのC作品に関しては、かつてある市立美術館において展示された時の写真資料が豊富に保管されている。ただし、その写真の利用についてはコレクター本人から直接許可を貰わないといけないのである。このC作品は現在は美術館に寄託品として預けているものだが、その撮影に関してもコレクターの許可を必要とするものであり、その点で調査が行き詰まっているところである。

一方D作品については、国外への貸し出し展示もあったことで、その際には拝観は無理であったが、ただしコレクター本人ではなく、側近の方との交渉を通じて何とか手札サイズの写真を入手することができた。なおこのD作品に関しては、資料館に、かつて東京国立博物館において展示された時の写真資料が豊富に保管されている。ただし、その写真の利用についてはコレクター本人から直接許可を貰わないといけないのである。この点をも含めて、その後もコレクターおよび側近の方との交渉には努めているが、肝心の作品にも直接接する機会はいまだないまま今日に至っている。

このように、二三の問題点を挙げてみたが、いずれ近い未来にこれらの問題が解決することを切に願いたい。

## 国東塔関係の調査 (1989 年度)

坂田 邦洋

国東塔は大分県の国東半島で鎌倉時代に造られ始め、南北朝時代に盛行した石造宝塔である。国東塔は国東半島を中心に 600 基ほど点在しており、一部県内に拡がっている。ほかに後世になって転売されたものが国内各地に 20 基ほどある。

国東塔研究の最初は、在銘塔の詳細な計測を行って形の変化の年代推定式を求めた。この式を用いて無銘の国東塔の製作年代の推定を行った。次に各地に点在している 600 基ほどの国東塔の実測・写真撮影などを行ってきた。この作業もほぼ終わり、現在は補足調査を進めているところである。

国東塔は型式が特異なうえ、鎌倉後期に国東半島に突如として出現する。国東塔は従来の宝塔とは形式的にずいぶん異なっているので、国東塔の祖型(源流)を国内の宝塔の中に求めにくい。そこで国東塔の祖型が中国または韓国にあるのではないだろうかと考えた。ここ数年来、中・韓両国にたびたび調査に出かけて関連宝塔の調査を進めてきた。昨年(1988)は8月に韓国、5月に中国浙江省天台山の七仏塔について調査した。調査成果については本誌第7号(1988)で報告した。天台県からの連絡によれば、筆者の報告によって天台県では七仏塔の重要性を再認識され、さっそく七仏塔調査委員会を発足させ製作年代などについて研究を開始したようである。その結果、筆者の推定のとおり、七仏塔は宋代の製作であることが判明したという。国東塔の祖型は天台山の七仏塔にあるように思われるが、時期的にも一致点をみたことになる。さらに拙著(前掲)が全文翻訳されて天台県史に収録されることになった。

今年(1989)は韓国1回、中国に2回、調査にでかけた。3月には中国西安郊外の草堂寺にある鳩摩羅什の舍利塔の実測調査を行った。韓国内に分布している浮屠は、この鳩摩羅什の舍利塔が祖型ではないかと考えられてきた。そこで今回の調査になった訳である。調査の結果、韓国の浮屠は基本的には鳩摩羅什の舍利塔を祖型としているようであるが、ほかにも唐代の経幢、層塔などの要素を取り込んでいるように思われる。



五台山東台頂にてラマ僧と筆者